

# 耽美な鎖くさり

プロローグ  
ロード  
オプション



[ ??? ]

「ねえコレ、死んでんじゃない？」





[ ??? ]

「普通に呼吸してます。胸が上下してるじゃないですか」





[ ??? ]

「今時行き倒れとは、面白いな」





[ ??? ]

「ったく、俺様の店の前でぶっ倒れてるなっの」





[????]

「うっせテメェら！ 介抱の邪魔だからとっとと散れ！」








[小鳥遊レイ]  
「!」








頬さで目覚め、俺はがぱりと身を起こす。




【小鳥遊レイ】  
(……ここ、は?)





視界に広がるのは見知らぬ室内、見知らぬ人々に覗き込まれている現況だった。



目覚めたばかりで対応できず、きょろりとしらへてみる。



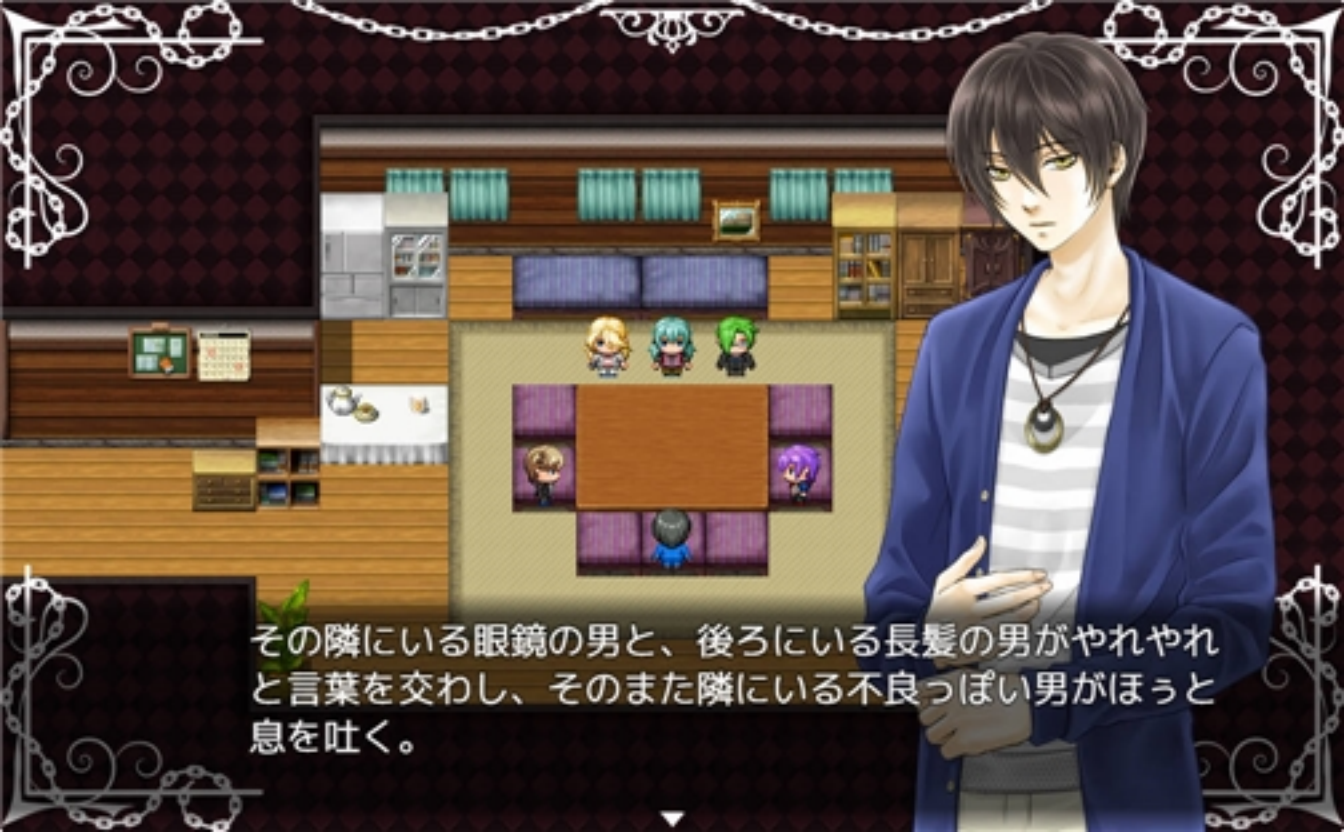
[チャラ男]

「あ！ 生きてんじゃん！」




と、真横から無遠慮に俺を覗き込んできたチャラそうな男が、大きな目を瞬かせたあとにこりと笑った。





その隣にいる眼鏡の男と、後ろにいる長髪の男がやれやれと言葉を交わし、そのまた隣にいる不良っぽい男がほうと息を吐く。





少し離れたところではパーカを被った男がこちらを眺めながら、楽しげににやにやと笑っていた。





【眼鏡の男】

「やれやれ、人騒がせな行き倒れですね」






【パーカの男】

「人を騒がせない行き倒れなんて稀だろう」





眼鏡の男が嘆そう言って嘆息を零し、パーカの男が淡々と  
答えを戻していた。



呆然と遣り取りを聞いていた俺だが、不意に張りのある大きな声を投げられてはっとする。





【不良っぽい男】


「やーっと生き返ったか。つーかテメェ大丈夫か？」






[小鳥遊レイ]  
「え」





不良っぽい男に問われるも、やはり状況が掴めない。



けれど自分が行き倒れたことだけは漸く思い出され、細々とした声音で答えた。





【小鳥遊レイ】

「大丈夫、だ……その、すまなかった」





【不良っぽい男】  
「あ？」





【小鳥遊レイ】

「たぶん、その……俺は行き倒れ、だよな」





[チャラ男]

「うわ！ それオレらに聞く！？」





【小鳥遊レイ】

「倒れてしまう予定はなかったんだだけ、ど、あ」







【眼鏡の男】

「どうしました？」






ぐうう、と盛大に腹が鳴った。



まるでお笑い番組のように明瞭な音を立てた俺の腹が、意識した途端に空腹を訴えて痛む。





卒倒するに至ったそもそもの理由に思い至った俺は、ぼわりと顔を熱くした。



[チャラ男]

「うっわ、そーいうコト」





【眼鏡の男】

「絶滅危惧種ですか……」







【パーカの男】

「へえ、これはますます興味深いな」





見知らぬ連中が思い思いの感想を零し、視線を送ってくる。



と、後ろにいた長髪の男がどっかと椅子に座って足を組み、俺に声を投げてきた。



【長髪の男】

「確かにここは飲食店だが、今は営業時間外だ。目を覚ましたならとつとよそで食ってくれ」





[小鳥遊レイ]  
「あ」







もっともな言い分だと立ち上がろうとすれば再びの眩暈が襲い、仰向けに倒れ込んだ。





こりゃなんか食わせてからのほうがいいぞ、だけどコイツ金持ってんの？





好き勝手言われるながら、もはやささやかな動作すら億劫なまま目を閉じる。





[小鳥遊レイ]

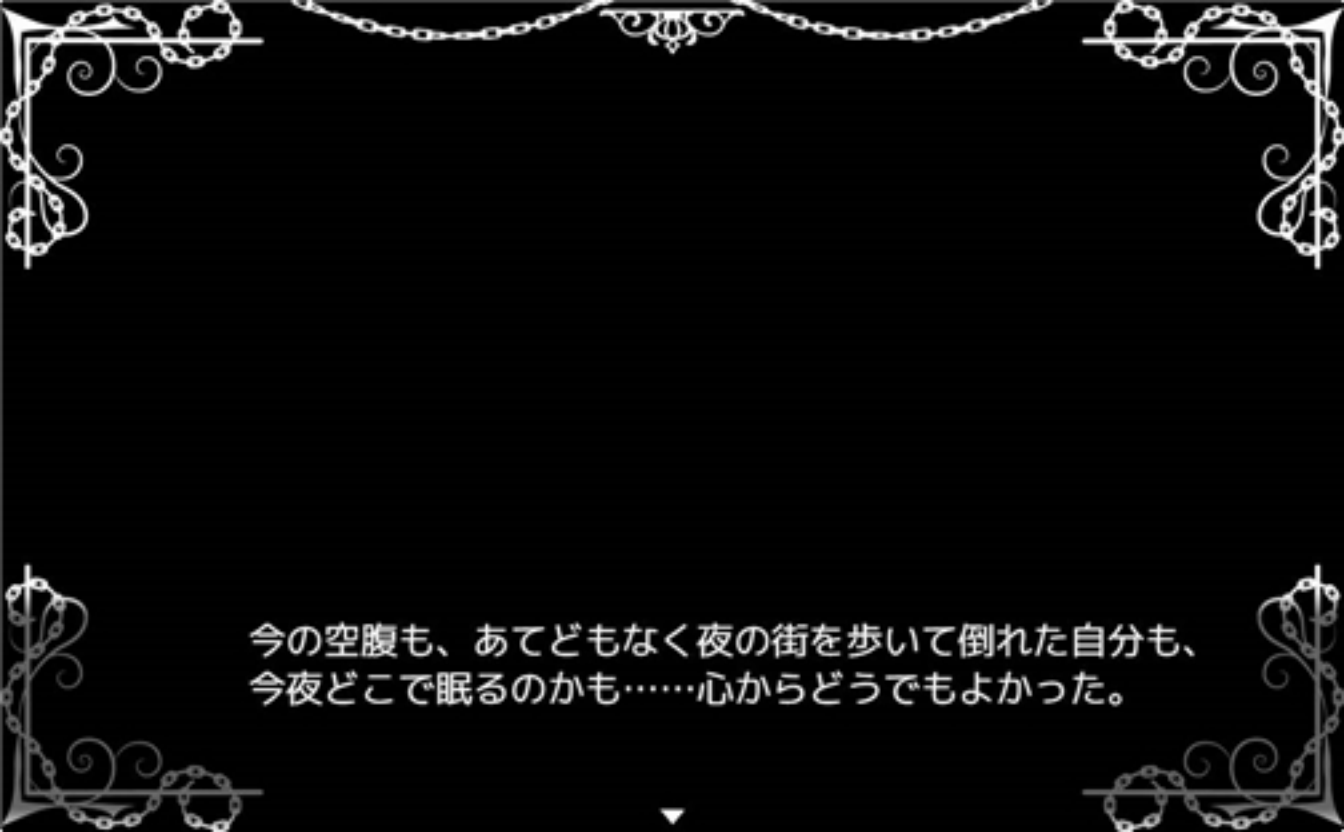
(どうでもいい……もう、なんでもいい)







自身の悪い口癖が、いつものように頭を過った。






今の空腹も、あてどもなく夜の街を歩いて倒れた自分も、  
今夜どこで眠るのかも……心からどうでもよかった。



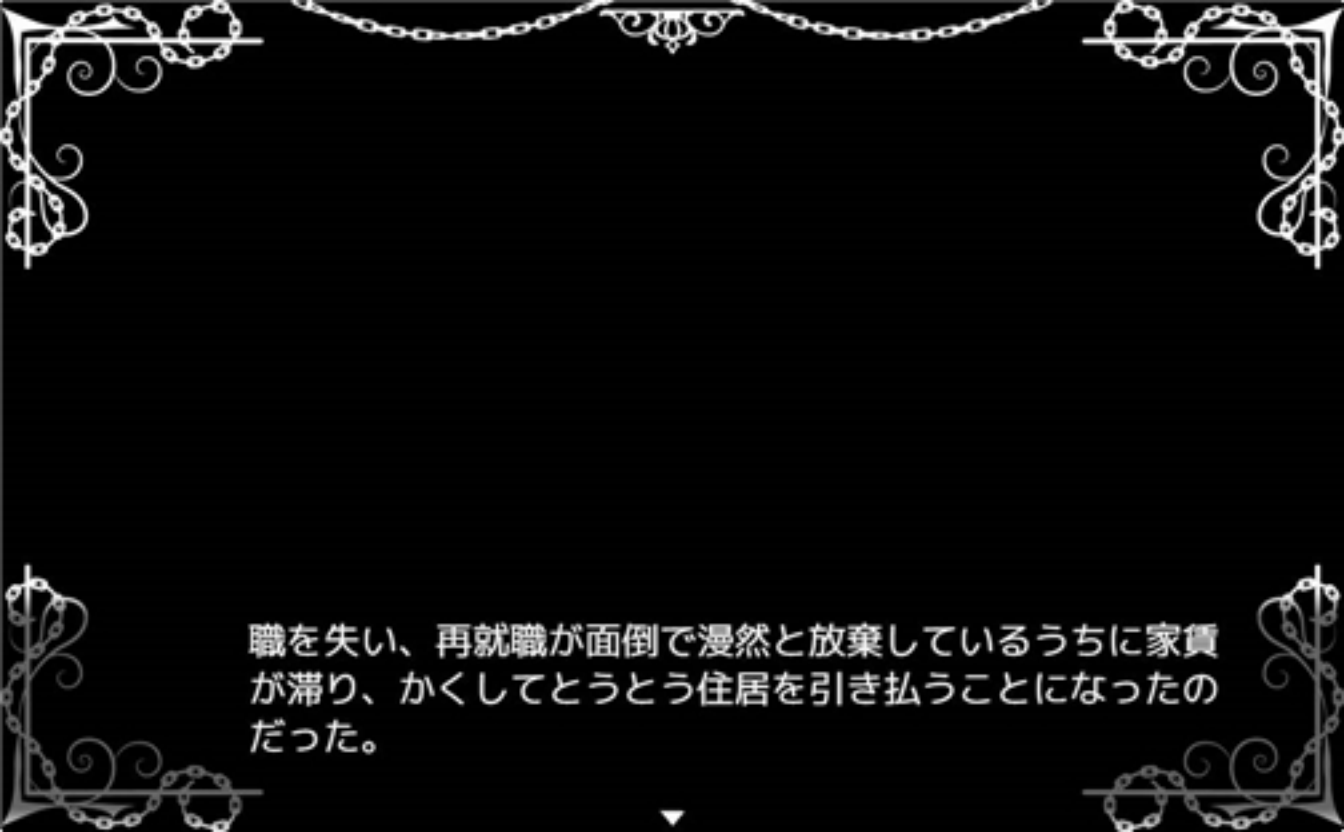


財布にはまだ金もある、明日になれば貯金も下ろせる。




けれど、それは新しく住居を借りるには到底足りるものではない。





職を失い、再就職が面倒で漫然と放棄しているうちに家賃が滞り、かくしてとうとう住居を引き払うことになったのだった。





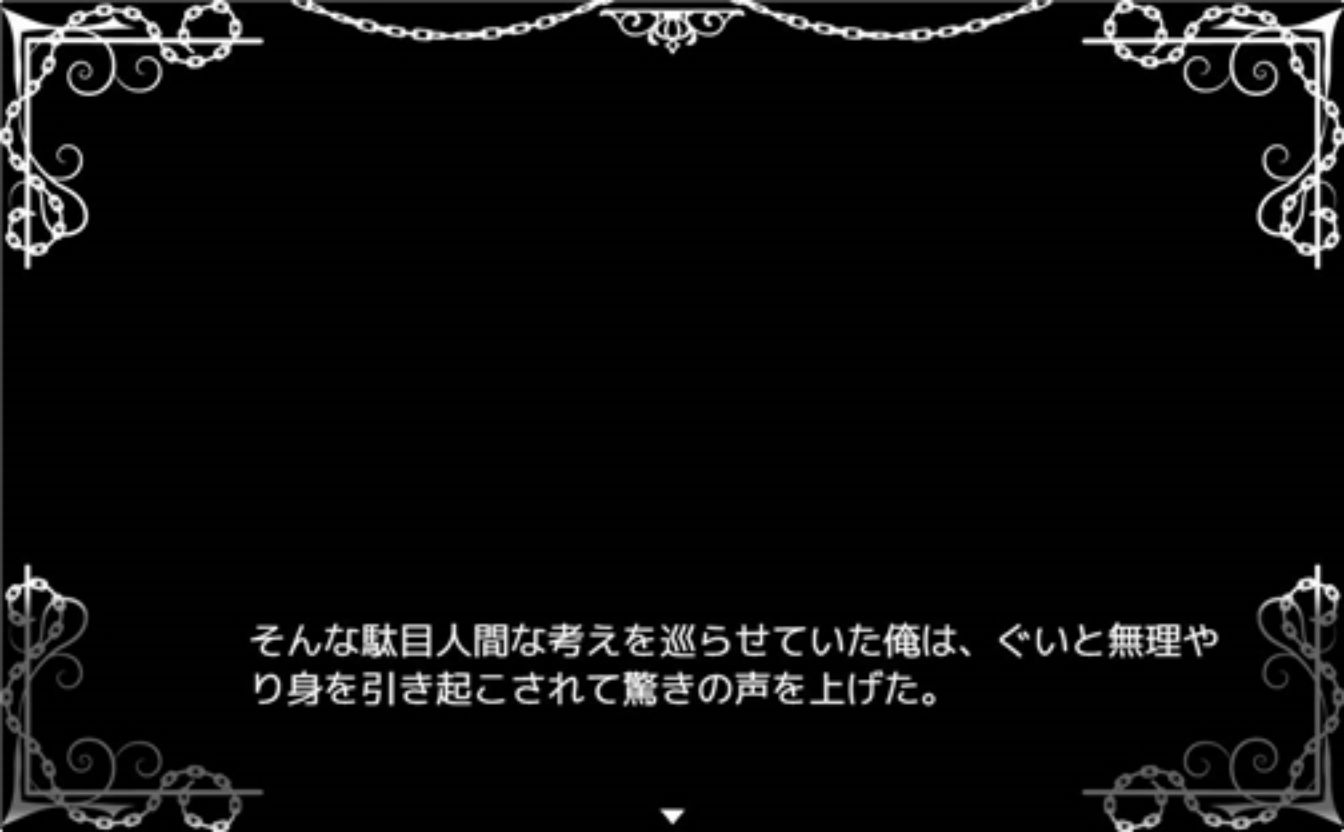
[小鳥遊レイ]

(まあ……何が食べたいか思い浮かばなくて、もうどうでもいいと思っていたら倒れたのが理由なんだが)






来世に生まれたら、漂うだけの藻になりたい。



そんな駄目人間な考えを巡らせていた俺は、ぐいと無理やり身を引き起こされて驚きの声を上げた。





[小鳥遊レイ]  
「え!？」





[不良っぽい男]  
「ほらよ、食え」





唐突に、盆に乗せられてほかほかと湯気を立てる丼を渡される。





きよとんと目を丸めていれば、代金ならこいつらが払ってくれたからよ、と視線で指し示された。





チャラそうな男が笑顔で手を振り、眼鏡の男が夢見が悪いと困りますからと言い捨てる。





パーカの男がこちらを観察するようにじろじろと視線を送り、長髪の男がとっとと食べと顎で促してきた。





[小鳥遊レイ]  
(.....)





無一文だと思われたのだろうか、それなら後できちんと支払えばいい。






今は言語を発することすら億劫なので頭の中だけで呟いて、  
眼前で良い香りを漂わせるチャーハンを口に運ぶ、と。





[小鳥遊レイ]  
「うまっ!？」



A top-down view of a restaurant interior. The room has a dark brown checkered patterned wall with white decorative corner ornaments. In the center, a wooden table is set with a plate of food, a glass, and a small blue object. Five characters are seated around the table: a blonde character at the top, a blue-haired character on the left, a green-haired character on the right, a purple-haired character at the bottom right, and a blue-haired character at the bottom. In the background, a blonde character stands behind a counter. To the left, there is a counter with a menu board and a calendar. To the right, there is a bookshelf and a door. A small blue robot-like character is on the floor to the right. A potted plant is in the bottom right corner.

ここ近年で一番大きな声をあげてしまった。



その美味しさは形容しがたく、俺の凡庸な頭では美食家の  
ように言葉を並べ立てることができない。







異様に美味しい。アレがアレソレで、コレがアレで……  
などとはうまく言えなかったが、とにかく……とにかく、  
美味しい。





【不良っぽい男】

「ははっ、うちの店のは美味えだろ」





[長髪の男]

「コラ雇われバイト、いつから貴様の店になった。ここは俺の経営する店だぞ」





相変わらずわちゃわちゃとした応酬が聞こえるが、今は眼前のチャーハンを掻き込むことが最優先だった。



大きな好き嫌いもなく味にも頓着ないのが常だが、この美味しさはそんな食への無関心をものともしない魔力を持っていた。





[小鳥遊レイ]

「……ごちそうさまでした」





[パーカの男]

「へえ？ この行き倒れ、礼儀は正しいんだな」





【眼鏡の男】

「食後の挨拶ぐらいできるのが常識でしょう」







[チャラ男]

「まあいいや、なあなあ行き倒れクン！ 名前は？ 職業は？ なんで倒れてたの？」





[小鳥遊レイ]  
「は？」





[チャラ男]

「ほらほら、自己紹介タイム！」





[小鳥遊レイ]  
「え!？」





チャラそうな男が、俺の背中を馴れ馴れしくバンバンと叩いて先を促す。





けれど休ませて貰ったうえに食事まで世話された手前、返  
答しないのも失礼かも知れない。





万遍なく周囲に視線を向けた俺は色々と諦め、億劫さで重くなりかけていた唇をゆっくりと揺すった。





耽美な鎖

くちん






【小鳥遊レイ】  
(……視線が痛い)



自己紹介タイムとやらを終える。



名前、年齢、職と住居を失ったこと、倒れた理由は食事が面倒だったこと……聞いた全員がありえないといった目で俺を見る。




自分が異様に適当な性格だとは承知しているが、こうも一気に奇異の視線を注がれると流石に気にしてしまう。



【小鳥遊レイ】

(それに、まさか俺だけの自己紹介じゃないとは)





そう、なぜか全員の名前や職業を聞かされたのだ。



行きずりの関係で必要があるのかと思いつつ、頭の中で繰り返しながらぐるりと見渡す。




七瀬タクミ【ナナセ\_タクミ】、二十一歳。





暴力団の末端組員でーす、と明るく元気に告げられて驚いたのは黙っておく。




双葉カズヤ【フタバ\_カズヤ】、二十八歳。



この中では唯一の真っ当な会社勤めらしく、やたらと物腰が堅い。




三月シロウ【ミツキ\_シロウ】、二十三歳。




自宅で株をやって暮らすデイトレーダーだとか。なんというか正直、不気味だ。



陸野ヨイチ【リクノ\_ヨイチ】、二十六歳。




この店『エデン』のオーナーらしい。元No. 1ホストらしく、派手な外見にもなるほど納得がいく。



時東ショウゴ【トキトウ\_ショウゴ】、二十五歳。






『エデン』の雇われ店員とのこと。粗暴な物言いの割にやたらと親切だ。



【小鳥遊レイ】

(タクミって奴が一番歳が近くて、俺よりひとつ上なのか)





顔と名前を記憶するのは苦ではないが、面倒すぎて活かしたことはない。




職に就けば人並み以上にこなせる方だと思うも、それが億劫という時点でどうしようもないのだ。




【七瀬タクミ】

「レイ……でいいよね？ なにポーッとしてんの」

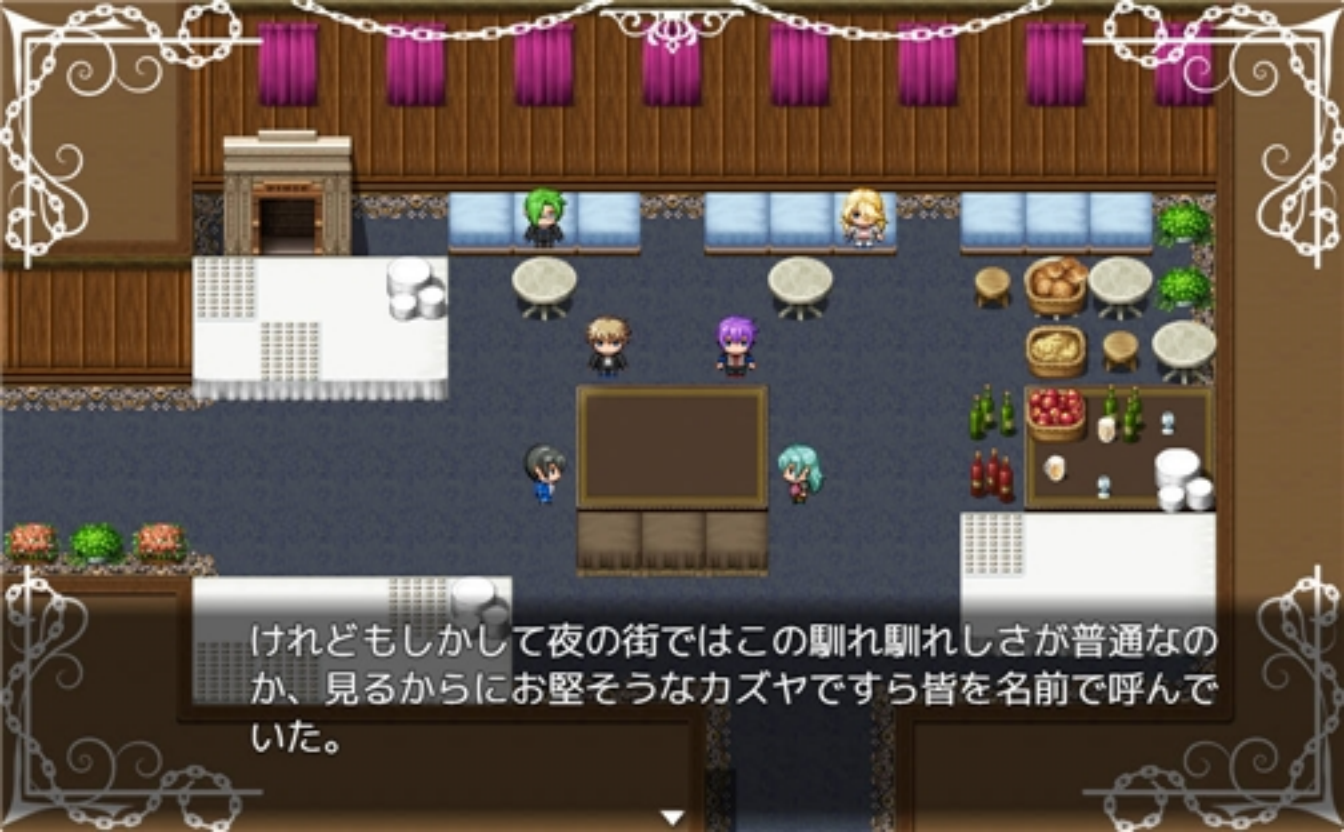




タクミが俺の顔を覗き込む。



名前呼びはこれまで殆ど経験がなく、一瞬だけ呆けてしま  
う。



けれどももしかして夜の街ではこの馴れ馴れしさが普通なのか、見るからにお堅そうなカズヤですら皆を名前で呼んでいた。





【双葉カズヤ】

「タクミ、これだけ一気に自己紹介を並べ立てられたので  
すからさすがに呆けもするでしょう」






【小鳥遊レイ】

「あ、そういうわけじゃ……もう全員覚えました」





寝起きの際は思わず崩した言葉遣いを、敬語に戻して答える。



【三月シロウ】

「もう覚えた？ 本当に興味深い奴だな」





【小鳥遊レイ】

「え」







【三月シロウ】

「できる奴なのに行き倒れ、か」



A top-down view of a restaurant interior. The room has dark wood-paneled walls and a blue carpet. At the top, there are purple curtains hanging from a white chain. In the center, a blackboard is mounted on the wall. To the left is a white counter with a menu board. To the right is a bar area with bottles and a menu board. Several small, chibi-style characters are scattered throughout the room. A white text box is at the bottom.

シロウが静かな、けれど射抜くような視線を合わせてくる。



分析でもされているような感覚にたじろぐも、俺は素直な言葉を述べた。





【小鳥遊レイ】


「やらない奴は、できない奴だと思います」





【三月シロウ】

「！」



自虐でもなく卑下でもない。無感動な表情で伝えれば、シロウが驚いたように目を丸める。



ほどなくして一笑したシロウが、自分で言うとはますます面白いと言い放ち、ちらとヨイチを見て告げた。




【三月シロウ】

「ここで雇ってやればいいんじゃないか」





【陸野ヨイチ】  
「は!？」



話を振られたヨイチが綺麗な顔を顰める。



こんな表情でも端正さが際立つのは流石は元ホストか、などと呑気に眺めていれば、話の焦点がどうやら俺だと遅れて気付く。





【小鳥遊レイ】

「……え!？」





[時東ショウゴ]

「いやいや待って、ホールも厨房も人は足りてんだよ」





【陸野ヨイチ】

「おいショウゴ！ だからなんで貴様は自分の店みたいに  
発言するんだ！」





【七瀬タクミ】

「いいじゃんいいじゃん、雇っちゃえー！」





[双葉カズヤ]

「人ひとり雇うというのは、あなたたち暴力団員を拾うのとはわけが違いますよ」





【七瀬タクミ】

「あ、カズヤさんそーいうの偏見ッス！」





【小鳥遊レイ】

「待ってください、俺の話ですよね!？」





【七瀬タクミ】

「あーもう！ レイの敬語、堅苦しいから禁止ー！」









【小鳥遊レイ】

「えええ!？」





タクミ自身も崩れているとはいえ敬語なのに、まったくもって理不尽な指令を出される。




けれど言われてみればカズヤのように染みついた敬語や、タクミのように親しみを残す敬語と違い、俺の敬語は半端に冷たいのかも知れなかった。



【小鳥遊レイ】

「わ、かった……で、その雇うって話は俺を、だよな？」





流儀に倣って敬語を崩せば、まるで自分が夜の住人になっ  
たかのように場に馴染んだ。



にこりと笑ったタクミが、そうそう！ と大仰に頷き、顔をぱっとヨイチに向けて明朗な声をあげた。



【七瀬タクミ】

「ねえヨイチさん、これも何かの縁でしょ？」





【陸野ヨイチ】

「縁ってなあ……ならお前の組へ連れててけ」







【七瀬タクミ】

「え、いきなり暴力団はキツイでしょ！ まあ本人が望むなら別に、いいっすけど？」





【小鳥遊レイ】

「え、遠慮する」





【三月シロウ】

「おいタクミ、怖がられてるぞ」

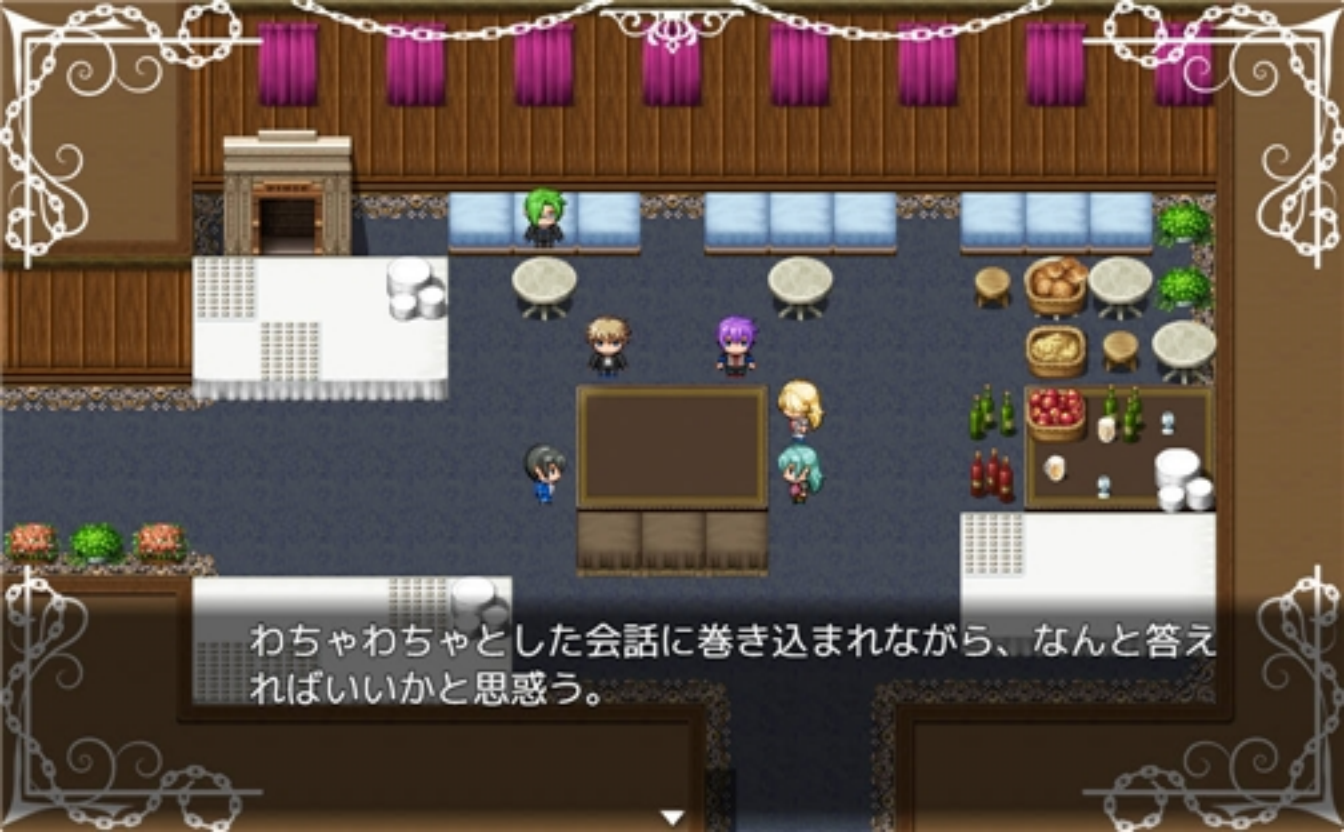




[双葉カズヤ]

「ああもう……收拾がつきませんよ」





わちゃわちゃとした会話に巻き込まれながら、なんと答えればいいのかと思惑う。





職に就く必要はある、けれど貪欲に喰らいついてまでとは思わない。




こういう性分が現状を招いているのだが、積極的に動くことはどうにも苦手だった。



【小鳥遊レイ】

「あ」





と、所在なげに視線を動かした先に目が留まった。



【小鳥遊レイ】

「これは……」





ふと大きなテーブルの上を注視すれば、ぷりぷりとした餃子が山のように積み上がっている。



完成と未完成に分かれた皮と具材は、圧倒的に異様な物量だった。



【時東ショウゴ】

「あ～、それな。明日から一週間『餃子祭り』やるんだよ」





【小鳥遊レイ】  
「餃子祭り？」





[双葉カズヤ]

「ええ。そもそも私たちがここにいるのは、餃子食べ放題と引き換えに手伝いに駆り出されたからです」





【三月シロウ】

「タクミとオレも同じ理由だ。この餃子は絶品だからな」








【小鳥遊レイ】

「そうなのか」





じっと餃子の山を凝視する。



嘆息したり、複雑な表情を浮かべる人物が多いということは、進捗が芳しくないのだろう。



今がそれなりに遅い時刻であることも加味すれば、作業が遅れ込んでいるのかと予測をつけた。



【小鳥遊レイ】  
「俺がやる」





【陸野ヨイチ】  
「は？」

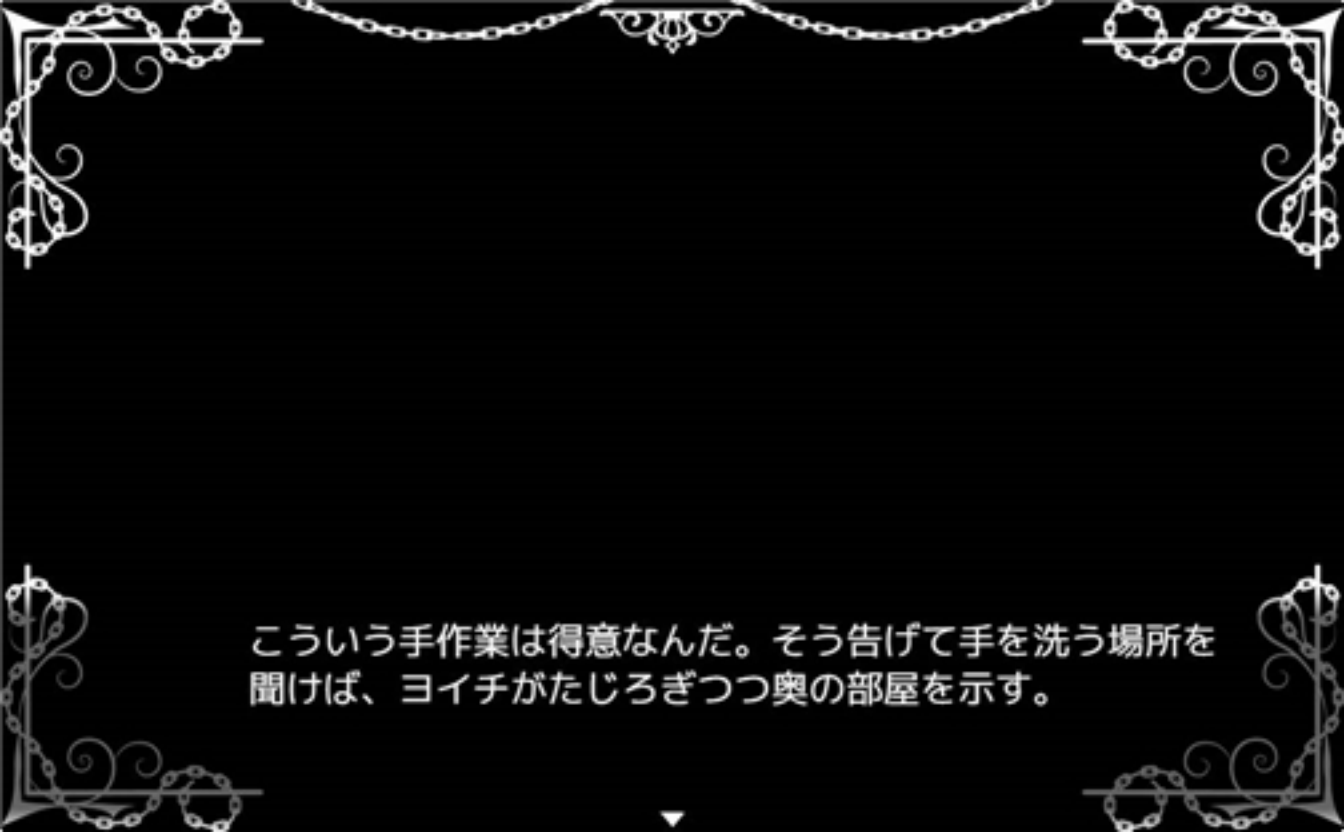





【小鳥遊レイ】

「金も払うつもりだけど、チャーハンが美味かったお礼」

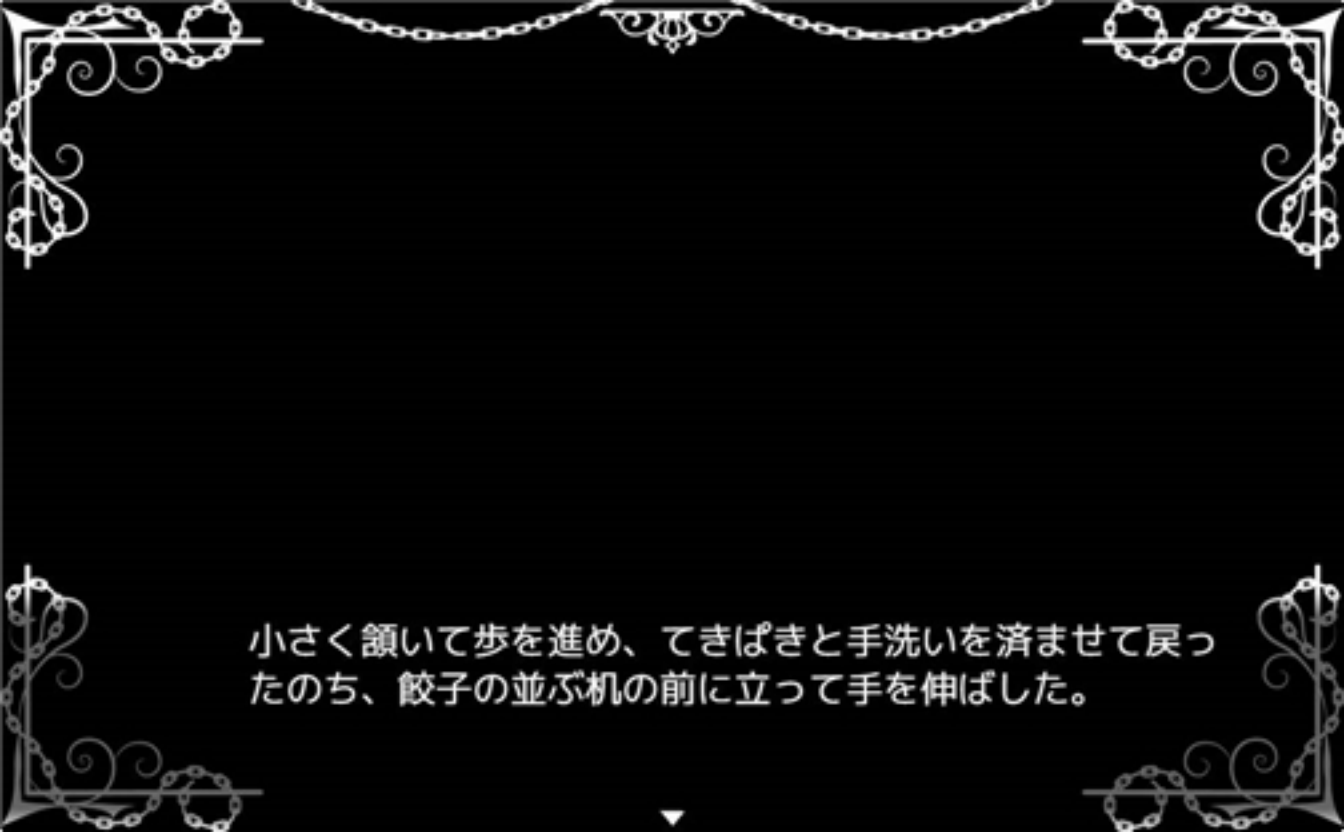





こういう手作業は得意なんだ。そう告げて手を洗う場所を聞けば、ヨイチがたじろぎつつ奥の部屋を示す。







小さく頷いて歩を進め、てきぱきと手洗いを済ませて戻ったのち、餃子の並ぶ机の前に立って手を伸ばした。





【陸野ヨイチ】

「！」









[時東ショウゴ]

「こりゃ、マジですげえな」





[七瀬タクミ]

「う、っわ……早っ」





【三月シロウ】  
「へえ？」






【双葉カズヤ】

「いやこれは、早すぎませんか……？」





宣言した通り、器用さには自信がある。手捌きに由来する迅速さにも自信があった。



普段なら面倒さもあるって、自主的に発揮しない能力。



けれど気紛れが働いたのは、俺からすればこの程度の量で苦心する人たちを慮ったのか、夜の街の気安さにあてられたのか。



[小鳥遊レイ]  
「終わった」





[七瀬タクミ]

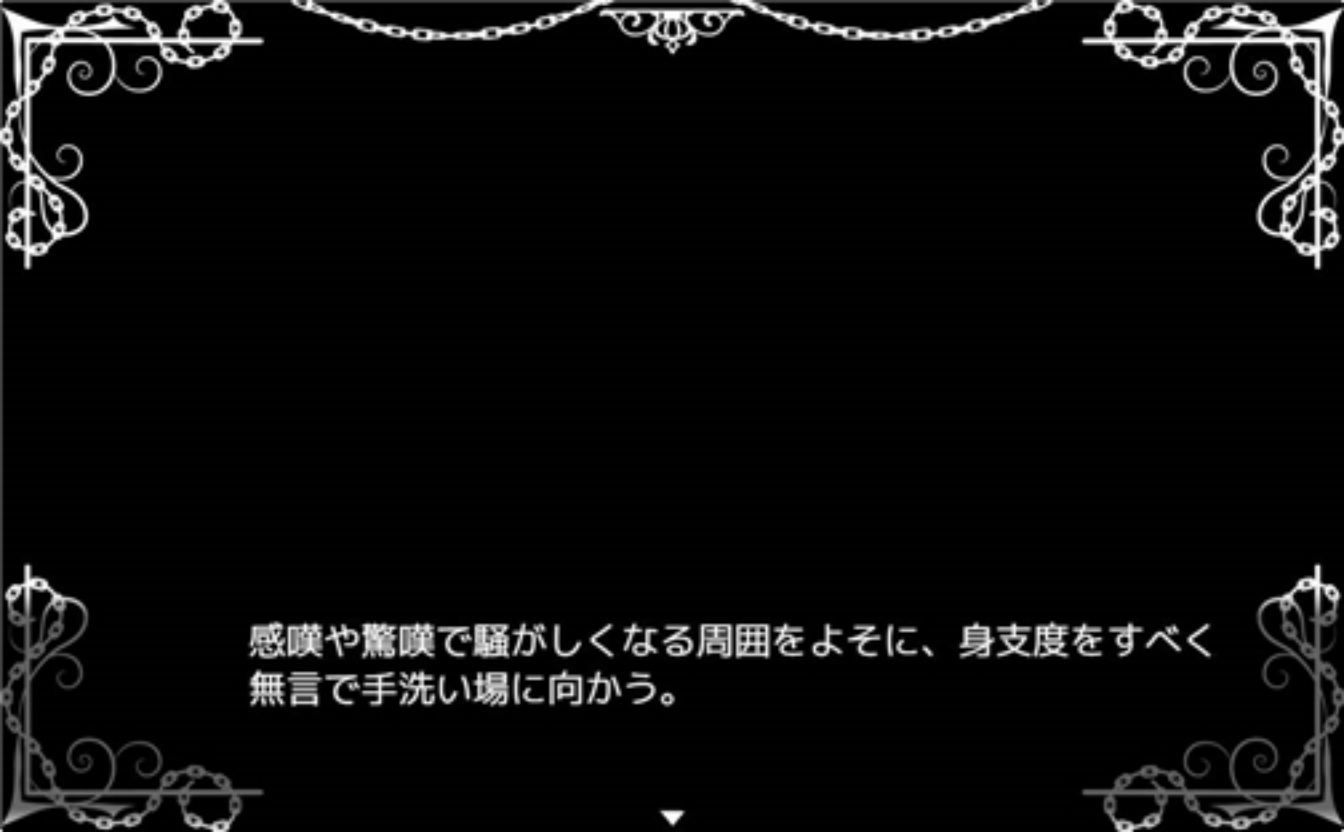
「はっや！！」






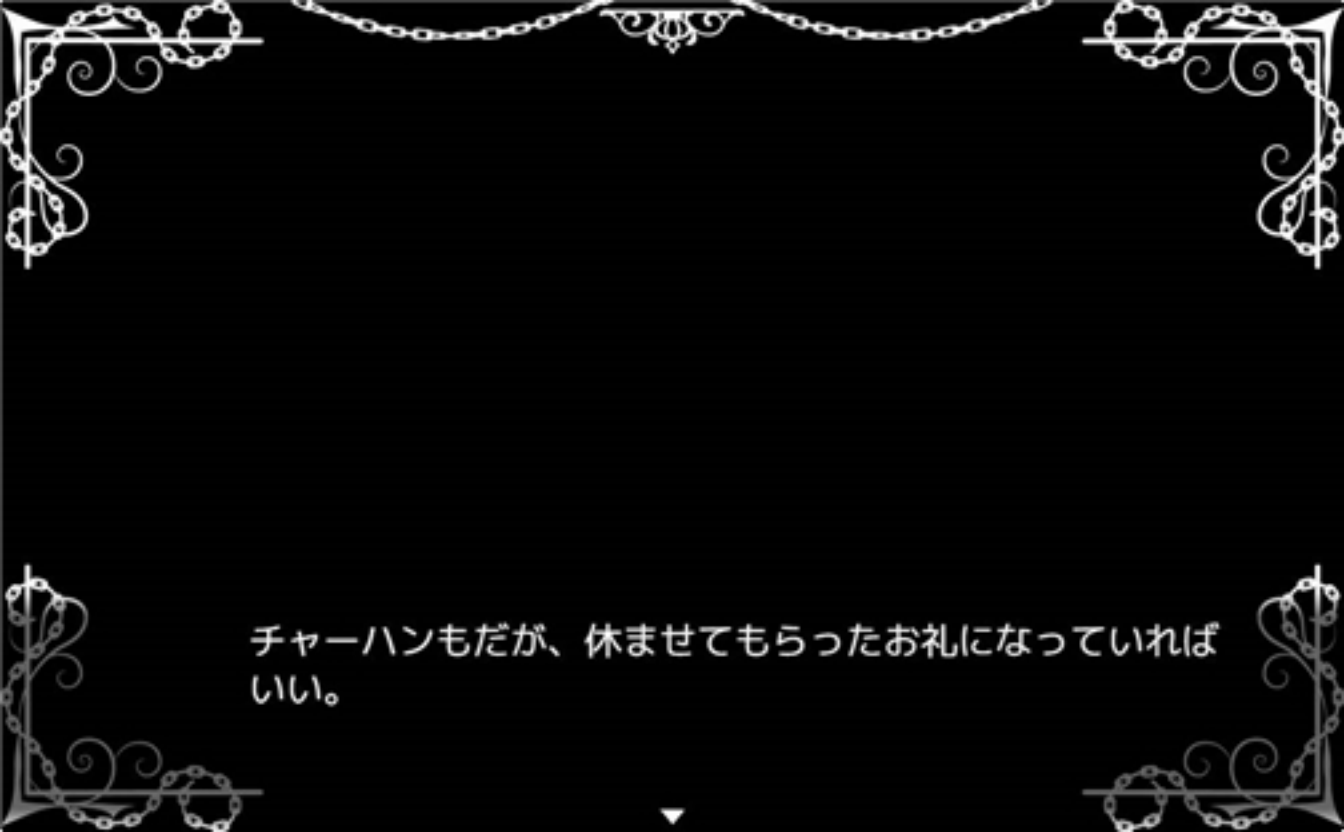
[時東ショウゴ]  
「超人かよ!？」






感嘆や驚嘆で騒がしくなる周囲をよそに、身支度をすべく  
無言で手洗い場に向かう。

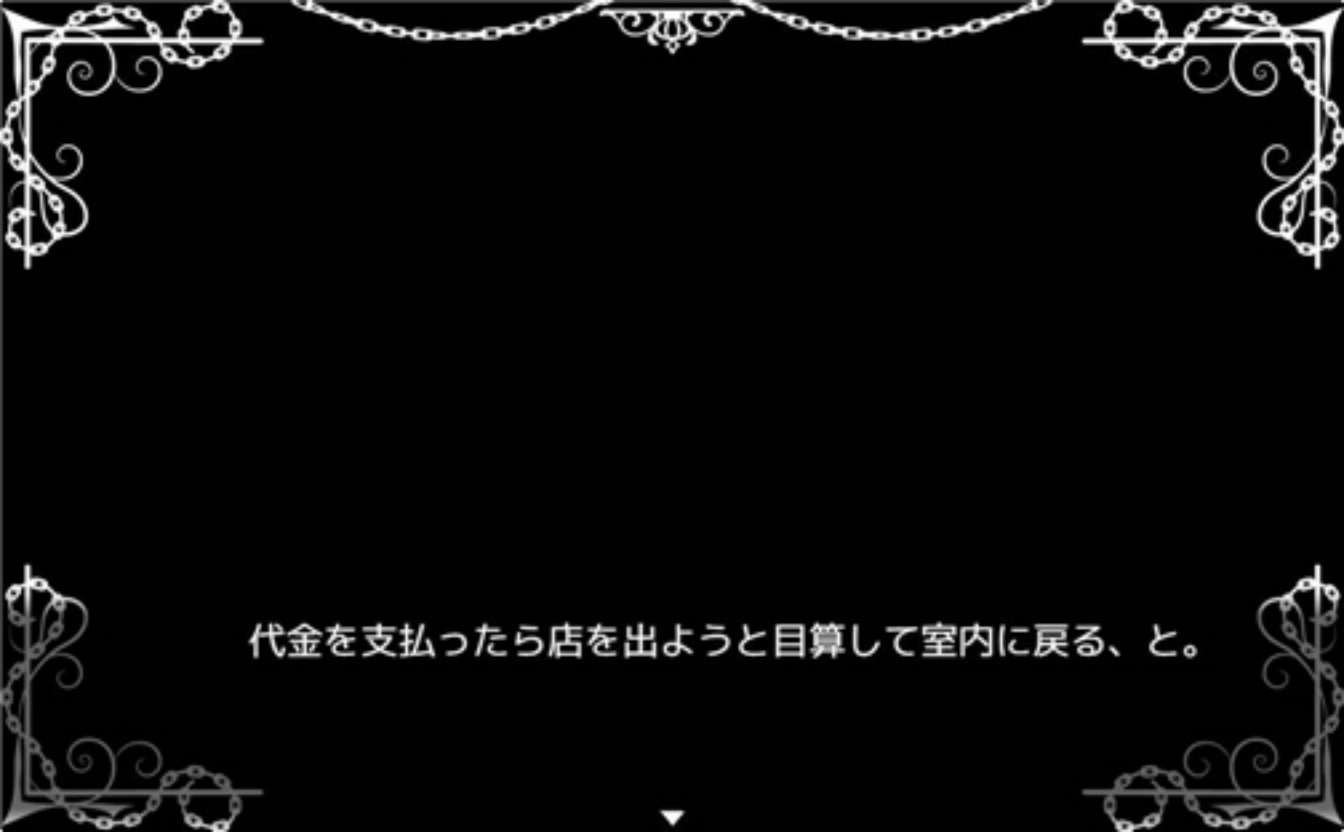




チャーハンもだが、休ませてもらったお礼になっていけばいい。







代金を支払ったら店を出ようと目算して室内に戻る、と。



[陸野ヨイチ]

「おい決めたぞ、一週間ここへ置いてやる」





[小鳥遊レイ]  
「……え？」





俺の意志も聞かず、ありがたく思えよと鼻を鳴らしたヨイチが何やら指示し、ショウゴが部屋の外へと消えていく。





戻ったショウゴは薄手の毛布を手にしており、謎の展開にぱちくりと目を瞬かせた。





[陸野ヨイチ]

「常勤の人手は足りてる。従業員を増やす必要はない。が、餃子祭りの間だけは貴様が役に立ちそうだ」





[小鳥遊レイ]

「は……？ っは？」





[陸野ヨイチ]

「寝泊まりはソファで良ければここでしろ、賄いも勝手に作れるなら食っていい。給料は宿代を差し引く。どうだ？」








[小鳥遊レイ]

「どうだ、って」

俺は働きたいとは一度も言っていない。




言いかけるも、ショウゴに毛布を突き出されて答えに窮する。



そう、働きたくないとも言っていない。どうでもいい、なんでもいいのだ。





良くも悪くも流されやすい、適当な俺が取った行動は言うに及ばず。



[時東ショウゴ]


「お」






[小鳥遊レイ]

「……」




毛布を受け取って小さく頭を下げる。





とりあえず一週間はものを考えなくてもいい、そうと思えば降って沸いた僥倖かも知れない。



場合によっては一週間のうちに思案を働かせ、職を探すことだってできる。



それをするかしないかはさておいて、外へ出て寝床や諸々の問題にぶち当たるよりは良策だと思えた。






[小鳥遊レイ]

「……よろしく、頼む」





ぐるりと全員を見て、告げる。



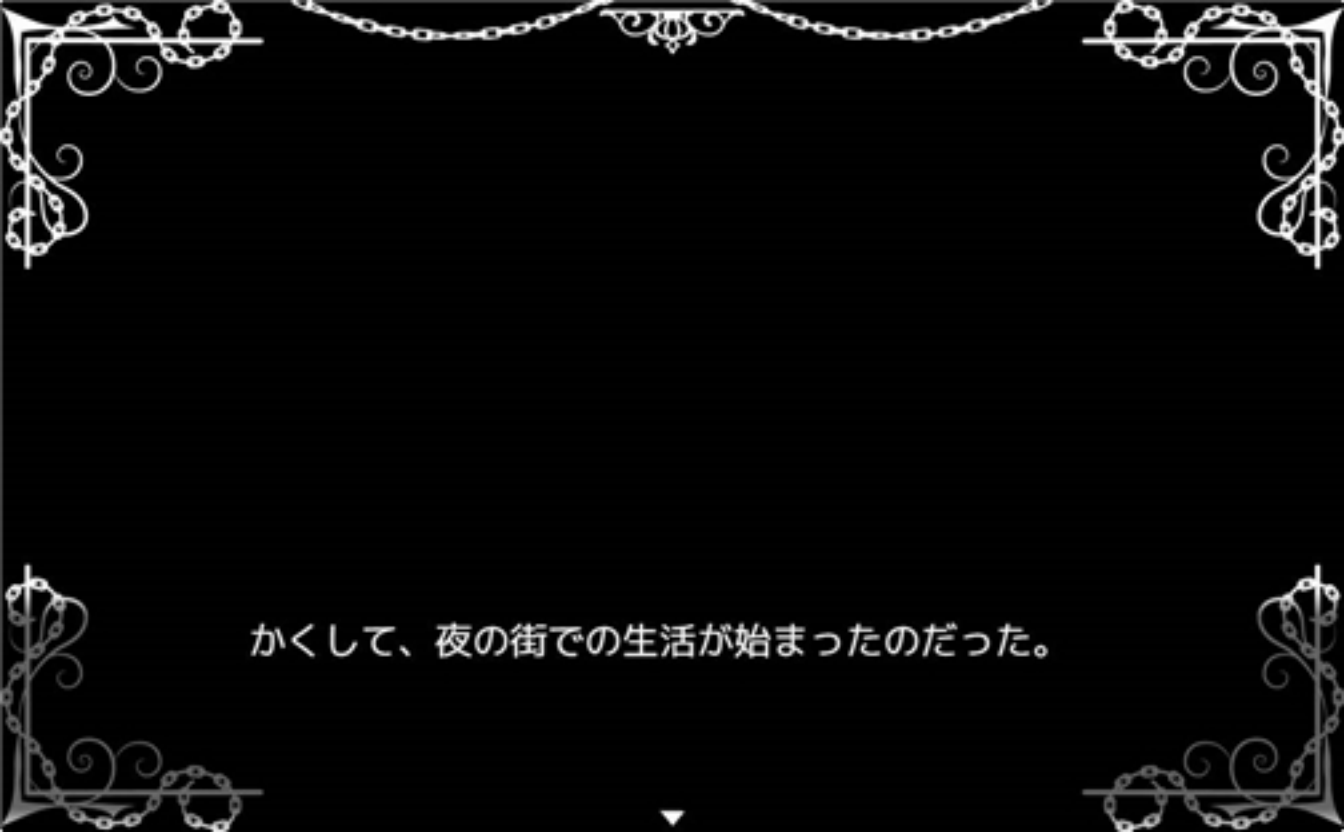
本来ならオーナーであるヨイチのみに伝えれば済む言葉だった。





けれどこの場にいる他の人間にも、なんとなくではあるが、  
よろしくと言いたい気分だったから。





かくして、夜の街での生活が始まったのだった。





耽美な鎖

くさり

◆気になる人は誰ですか？





七瀬 タクミ (ななせ・たくみ)


21歳。職業：暴力団組員



双葉 カズヤ

(ふたば・かずや)

28歳。職業：商社勤務



七瀬 タクミ  
双葉 カズヤ  
三月 シロウ

三月 シロウ (みつき・しろう)

23歳。職業：デイトレーダー